

自閉症の子どもたちを

われわれはどの程度

理解できているのであろうか

大分大学教育学部

助教授 小林 隆 児

早いもので私も自閉症といわれる子どもたちに接するようになって二十年を過ぎてしまいました。何事もやり遂げるまでには最低十年はかかるものと昔から親にいい聞かされてきましたが、自閉症研究の領域はどうも十年などの短い期間ではどうにもならないほどの深さがあるような気がしてなりません。二十年ほど経過して今更ながら痛感するのです。

ところで、二年前に二十年の区切りの意味でも追跡調査をやろうと考えて過去にお会いした全ての子どもたちを調査しました。山口県の親の会の人々にも多数ご協力いただきました。感謝の気持ちで一杯です。みなさんのご協力にお応えするために最大限結果を公表して自閉症理解の一助になれるようにと願い、その結

果をいろいろな機会で口頭発表したり、論文発表してきました。その一部はすでに目を通された方もおられると思います。

実は先月（一九九二年五月）、「発達障害研究」という学術雑誌に「青年期・成人期自閉症者の余暇活動に関する研究」という形で小生がまとめた論文が掲載されました。これは先の追跡調査の結果の一部をまとめたものですが、これには今までの自閉症研究ではほとんど明らかにされていなかった彼らの生き甲斐や人生の楽しみについて論じたものです。

われわれ「健常者」の視点では到底理解できないような彼ら特有な人生の楽しみ方があるような気がしてなりませんでした。彼らはやはり他者と同等な遊び方がうまくできないために、彼らなりの努力と工夫で自分固有な世界を作り、楽しんでいるような気がするのです。このことは実際の療育を考える時にどの程度考慮してきたのであろうかと考えると実に反省させられることばかりです。

振り返ってみてみると、今日では乳幼児期早期から

いかに早期発見して早期療育にのせていくかというところに自閉症療育の重点が置かれています。とにかく一日でも早く発見することが障害を軽くする数少ない方法であるかのように我々は考えて日々取り組んでいるような気がしてなりません。つまり、可能な限り「健常者」に近づけることが療育の最大目標になっていると、いいと思うのです。

このような取り組みは確かに子どもによっては随分と良い成果をもたらしたと、いいでしょう。

実は私が四年前に大分大学で仕事をしようになつて大分と福岡の自閉症の子どもたちをいろいろと比較してみることが増えてきました。福岡は恐らく九州で最も早期療育システムが整備された都市だろうと思います。その成果なのでしょいか、福岡市の自閉症の子どもは軽いという印象を受ける場合が確実に増えてきていると思います。でも個性の少ない子どもが増えてきているという実感を一方でもっています。大分の子どもと比較してその感を強くします。療育システムが充実していない大分では時に悲惨な例も経験しますが、

子どもによっては専門機関もない地域にもかかわらず周囲の人々の暖かい援助によって驚くほど伸びぐと成長している例に遭遇することがあります。勿論このような例は少ないように思います。でも早期療育は絶対的に善なものであるとして無批判的に進めていくにはどうも疑問をもつようになってきました。どうもなにか我々が気がつかない落とし穴がありはしないかと疑うようになってきました。

例えば早期診断がどの程度可能かという問題があります。正直なところ私には一歳台の子どもに自閉症の診断をつける自信はありません。またそのこと自体不可能だと思っています。そうした場合にわれわれは親に対してどのような助言をすればよいのでしょうか。特に保健所の健診システムのなかで実際に助言されている内容を聞くとはなはだ心許ないように思います。実に様々な可能性をもった乳幼児に対して我々はその程度の知識をもっているのだろうかと思ひますし、一年後の姿を予想することさえ困難です。したがって実際親にどのような助言をするかはなはだ難しい問題

をはらんでいます。とくに問題としなければならぬのは、なんらかの発達障害の疑いをいだかせる子どもに親に助言をする場合です。発達障害ないしその疑いをもつ子どもではほとんどの場合母親への自発的な愛着行動に欠け、そのため母親もつい放置しがちになってしまふ傾向は否めません。そうした状態にある親子に、もし発達障害の疑いがあることをあとの配慮を考へずに親に伝えた場合どうなるでしょうか。恐らく母親は子どもを慈しむという態度よりも障害をもった子どもなら少しでも早く発達が伸びるように働き掛けなければと思ひ焦燥感にかられながら子どもを指導するという方向に走っていきそうに思うのです。もしそうになったら母子間の生き生きとした感情交流はますます困難になってしまうのではないのでしょうか。そのようなになると子どもからみると母親は一人の訓練師のように写るかもしれません。早期療育の際に気をつけなければならぬ点だろうと思うのです。昨今では発達障害に関する学習や研修の機会が増え、療育に携わるスタッフもよく勉強されています。でもその中では障害

の性質やその障害に対してどのように指導すればよいかという技術論が中心になっているように思うのです。すると親もスタッフもすべてが訓練師になってしまいかねません。

子どもにとってそのような世界がいかに脅威にみちたものか想像してみてはいかがでしょうか。

なぜこのようなことをくどくどと述べてきたかといえますと、一人の子どもの成長の軌跡を辿ってみると、彼らが飛躍的な変化を遂げるようになった契機はどのような技術論的なものではないように思うからです。つまりは母親と子どもとの間で過去になかったような感情交流（もっと深い意味をもったものとして他の表現を用いたような気もしますが、他に表現方法が見当たらないのでこのように述べますが）が成立した時のように思うのです。それを困難にしてきた要因は様々ですが、最大の要因の一つは自閉症の子どもも自身の乳幼児期の問題であることは疑う余地はありません。つまり、子ども自身が積極的に母親を求めないし母親からの刺激に反応できるような能力に欠けていたた

めでしよう。しかし、この種の能力は欠損しているとは思われません。どうもしばらく遅れてこのような能力は育ってくるように感じます。その時間のずれ（タイム・ラグ）があるために母子の感情交流が困難になってしまっているように感じられる例を多々経験するのです。ですから母子の間での交流がいつかはかならず可能になってくることを信じて根気強く子ども自身の成長（成熟現象に近いものでしょうが）を待ち望む姿勢が大切なように思うのです。

私はけっして障害児の療育技術論を否定するつもりは毛頭ありません。しかし、技術が先行してしまうと、それまで長年要して身につけてきたものが些細な出来事でも簡単に消え失せてしまうことは少なくないからなのです。

自閉症の基本障害は何かという問題が昨今再び世界中で取り沙汰されていますが、自閉症を「情緒的接触の自閉的障害」とみなしたカナーの着眼点の確かさにあらためて教えられることが多いと私は考えています。われわれは何か新しい知識や理解の方法が生まれると

それに飛びつきそれまでのことを捨てて新しいものばかり目が奪かれてしまうという性向をもっているように思えます。長年の取り組みを余儀無くさせられる自閉症の子どもへの療育ではつい目新しいものに飛びつきがちですが、どうもそのようなことをやっても子どものためにはなっていないように思うのです。子どもは自分が分かってもらったという気持ちになれた時に驚くほどの成長をみせるようになります。それは自閉症の子どもでもほかの子どもでも全く変わるところはないように思うのです。

